

実作入門の必携・決定版！



生方たつる

短歌への出発

鬱屈した人生の時期に、「偶然」という運命によって短歌にみちびかれ、以来ひたすらに

「短歌の呪力」との格闘を生きつつける、稀代の女流・生方たつる。著者は、歌との出会い四〇年をかえりみ、

みずから語り、ときに具体的な例歌の添削を示しつつ、今なおためらいの中にある人々を「歌の世界へいざなおうとする。

短詩型文学」とことばとの、本質・魅惑にふれ、生と芸術のかかわりへ述べいたった、最適任者による実作入門の決定版。



角川選書

111

短歌への出発

昭和五十五年三月三十一日 初版発行

著者 — 生方たつる

© Tatsue Ubukata 1980

Printed in Japan



発行者 — 角川春樹 発行所 — 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三十三 郵便番号102

電話東京〇三三六二二(大代表) 振替東京三一九五〇八

装幀者 — 杉浦康平 協力 — 鈴木一誌・杉浦富美子

印刷所 — 旭印刷株式会社 外装印刷 — 旭印刷株式会社

製本所 — 株式会社宮田製本所

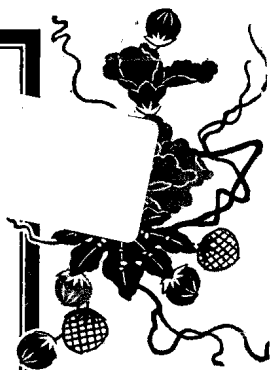
定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁本はお取り替えます

0395-703111-0946(〇)

生 信

の 出 発



角川選書

111

短歌への出発

生方たつゑ

目次

はじめに	七
一——人との出逢い（一）	九
二——人との出逢い（二）	二九
三——誰のために	四九
四——表現のいのち	五九
五——批評の情熱	七
六——個性はにじむもの	二七
七——添削で生きるとき	三九

八——遺産となる秀歌——三五

九——未来性を探って——二七

十——語りかけてくる歴史——二五

十一——短歌幻想譜——三五

あとがき——三三

はじめに

「短歌」を作り、書きとどめるようになってから、私はもはや四十余年の歳月を経てまいりました。短歌がすぎである、という自分の意志をもって出発した人とはちがった経路であっただけに、私は何故か、この歳月歌にかかわって生きてきたことに、目に見えぬ「短歌の呪力」を思わずにはいられません。

いつまでたっても、短歌は、これでよし、とするものが私には出来ませんでした。それゆえに、手探りしながら、「明日は？」という未知の部分への気負いを捨てることがなかったのかもしれない。

私には未知の部分を残した短歌の深さが魅力になりました。といって、決して私はそこに安坐するつもりはありません。

知りたいことはかぎりなくありますし、また知らねばならないことも多すぎます。

このようなことを考えながら、おりおり私は「出発のころ」を手繰りよせているのです。あの頃の手さぐり、迷い、そして灯火になってくださった先輩の作品やみちびきのことなど、はつきりと

記憶をとどめていることにおどろくのでした。

この恩恵に出逢った私が、ようやくこの恩恵を還元するべき年月をつみかさねてきたようにも思うに至りました。

私が短歌を書きはじめたころの手さぐりのように、今もためらっている人々がいられるはずで

「何でもいい。ヒントがほしい」

「短歌のための考えるヒントは？」

という人々に、私は逡巡の長かった私の恥をさらけ出して、私の「短歌の出発」を語っておくべきだ、と覚悟しました。

これが、私を今日まで育ててくださった人々への恩恵の還元だと思ふからです。

私はすでに短歌入門書を五冊出版していますが、それらとはいささか違った内容にしたつもりです。完璧ならぬ私の書いたもの、人はそれぞれの好みもありましょうが、この一冊から作歌へのヒントのかけらを拾っていただければ私の悲願はかなえられることになりましょう。

短歌を愛する人々のために、私は初心になってこの文を書いたことを告白いたします。伝統をもつ美しい短詩型を今も愛する多くの人々に。

——人との出逢い（二）

ひっそりとした庭に面した玻璃戸の方へ私は廻っていった。玄関でブザーを押すまでもなく、松村英一先生の書斎兼居間の様子をよく知っていたからである。そして必ずその部屋の中で先生は老体を横たえて臥していられる筈である。

一月の寒中にしてはほかほかとあたたかい日の午後であった。

「ごめん下さい。ごめん下さい」

と二度ほど声をかけたけれど返事は返ってこない。私はそこで戸を開けて、様子のわかっている先生の部屋へ入っていった。

濃いグレーのセーターの背中が見えた。私は近づいてから、

「先生！　おうかがいにまいりました。生方です」

声をきいて先生はすぐクルリと向きをかえて、

「やあやあ、よくきてくれてありがとう。元気ですか」

いくらか先生の目がうるんだように見えた。

「小さくなられた」

と私は思った。とたんに、

父も母も祖母もあて安ければ子はもてあそぶ古き松毬

という温和な一首が甦った。多峰山上でうたわれた中の一首であった。

父も母も、また祖母さえもいる、まどかな幸を羨望した日のことだけではなく、この作品の出来た頃の先生に出逢ったのは、もはや四十年も前の昔のことであったことへの追懐が私を涵したからである。

「デッサンをおろそかにしては訴えはよくなる」

私は松村先生からデッサンの大切さを教えられていた。てらいを捨てた「父も母も祖母もあて安ければ」というこの表現の、地味だが温い人間のふくらみに、私はいくたび引き寄せられていったことか。

四十年も前だったけれど、松村先生はすでに歌壇の大家でいられた。家族的にもめぐまれた状態であられた。

かつては前田夕暮さんが住んでいられた家であった、という住居だったから、歌人同士のおつき

合いのしのばれるものだった。私はそのお宅にいく夜か泊めていただき、上京すると先生のところで食事を御馳走になった。

亡くなられたらく子夫人が料理が上手であられて、私はいつもそれに甘えさせていただいていたから、弟子として寛大に扱っていただいたことになろうか。

らく子夫人を亡くしてから、先生は飽くことなく妻恋いのうたをうたいつづけた。

先生は薄べったくなった手をふとんの中から出して、

「私はね、もう九十一歳だよ。九十一歳になったんですよ。あなたはいくつになった？」

その声は意外に大きく力がこもっていて衰えは感じられなかった。

「私も先生のお年まであやかっけて生きとうございます」

少しく耳の遠くなられた先生のために、私も大きい声を出して答えた。

「ああ、あなたは長生きしてよい仕事をしなけりゃいかん。私はあなたの仕事を冥途で見つけますよ」

悲しげな調子などなく、冥途が今すぐ自分の地続きであるかのような平明さであった。

「いやでございます。生きていられて私の仕事を見守って下さらなければ」

というのを抑えるように、

「なに、冥途だってよくわかるよ」

といわれた。

私は持っていた手荷物 of 包みをして、タオルケットをとり出し、ふとんからはみ出している先生の胸もとにかけた。

「こりや、何ですか」

「タオルケットです。風邪をひかれないようにかけて置きましょう」

というと、先生は素直にうなずかれた。

かつて多峰山上でよまれたようなあたたかい家族関係とは裏腹な、さびしい先生の周辺である。

「老い」と「ひとり」を先生はどのように受けとめていられることであろうか。

らく子夫人に先立たれ、昨年は令息の夫人にも先立たれ、その令息も思^{おも}ひがちである。

はらはらと木の葉が落ちるように、身近から親しいものが亡くなっていく。それをじっと見つめながら「これも運命」といとたやすく片づけていくことが、どのように切ないものかを先生はひとり考えていられるにちがいない。

松村先生は純一で、あるときには頑固だと言える譲らぬところを持っていて、いい加減の慰めなど受けつけぬ性格を、私は長く見守ってきた。温い寛大な心で人を抱擁する一面、へつらいや、いい加減の気やすめを蹴^きってしまわれる先生の「老い」の潔癖な孤独を私は切なくなるほど思った。

私たちの大きい声での会話をききとめられて、令息のお嫁さんの姉にあたるという人がお茶を運

んできてくれた。

「さあ、起きようか」

先生は床の上に起き上られた。起き上られると、先生は一層小さく、薄くなって見えた。

「さあ、お茶をおあがりなさい」

床の上におき上った先生は小さくなった手で私のお茶をとってくれた。お茶がこぼれそうになるほど力がなく、不安定であった。お茶菓子の手拭の袋を切ろうとされたけれど、なかなか切れそうもなかった。お手伝いの人が切って差し上げると、その封を切ったものを私に差し出して下さった。

「おあがり」

健康な時の松村先生と、それは少しも変らぬやさしさであった。

病人で寝ていられる松村先生の精一杯のサービスを私は胸痛いほどに感謝してうけた。

御機嫌のいい顔であった。

すると突然、先生は明治の頃の流行歌の一曲さをうたい出された。

今まで私はそのような先生に出逢ったことはなかったからびっくりした。

少年であった日の思い出が、このうたの中で生き生きとよみがえっているにちがいない。

下町で育った先生の少年期に、このうたの一節は何かにつけて心を引き立てる役をしたのである。

う。

「御機嫌のいい時には、人たちの寝しずまったところ、お芝居のセリフをたのしんでいられるようなんです」

一部は、はっきりしていられても、一部分はもはや老耄ろうもうの中へなだれはじめてしまわれたのであろうか。

唄がやむと、

「生方さんに逢うのは三年ぶりですね」

とおっしゃる先生、

「いいえ去年の夏伺っていますから一年たっていないんです。実は——」

と私はそこまできて口をつぐんだ。主人が去年（昭和五十三年）十月六日に死去したことにふれねばならなかったからである。

いつも年末に御挨拶に伺うのだが、去年はそのゆとりもないまま年がくれた。

一切愚痴を言わなかった先生だったのに、らく子夫人が亡くなられてから、

「男があとにのこされて生きているのは切ないよ。生きていてもつまらない」

とこぼされた先生であつたけれど、私は夫の死にふれることをさけた。

「誠さんは元気ですか」